

学生フォーラム世話人 藤杏子(立教大学大学院)
八木一弥(立教大学大学院)
船木豪太(早稲田大学大学院)
小杉亮太(一橋大学大学院)

2025年度 第2回学生フォーラムについて

会員の皆様におかれましては日頃より日本スポーツ社会学会学生フォーラムの活動にご協力いただき、ありがとうございます。2025年度第2回の学生フォーラムについて、下記の通り個人研究報告会並びに学生シンポジウム企画についての意見交換を開催いたします。

先日ご案内しました通り、第2回は実地とオンライン形式での開催とします。発表者は以下タイムテーブルの通りとなっております。実地参加につきまして若干の余裕がございますので、12月26日(金)の正午までに申し込み期限を延長いたします。オンライン参加を希望される方につきましても12月26日(金)中までに、いずれもお申込みフォーム(<https://forms.gle/gVPpfgCcKzSsSkL59>)より必要事項をご記入いただき、ご連絡ください。

また、フォーラムの参加自体は学会員以外でも可能ですので、ご興味をお持ちの方がいらっしゃいましたら、お知り合いの方にもお伝えいただけますと幸いです。

ご不明点がある場合は、世話人(sportsociology.sewanin@gmail.com)まで直接の連絡をお願いいたします。

お忙しいところ大変恐縮ですが、万障お繰り合わせの上、ぜひご参加下さい。

記

日時	:	2025年12月27日(土)14:00~17:00(予定)
場所	:	対面:立教大学池袋キャンパス 7号館7201教室(7号館2階) オンライン:Zoomミーティングによるリアルタイム配信
お申し込みフォーム	:	https://forms.gle/gVPpfgCcKzSsSkL59
参加希望者申込締切:	:	<u>2025年12月26日(金)正午(対面)</u> <u>2025年12月26日(金)(オンライン)</u>
その他	:	申し込みをされた方に、メールにて正式な開始時刻と会場またはZoomミーティングIDをご連絡いたします。そのため、メールアドレスは正確にご記入ください。 研究会終了後(17:00頃予定)、18時より懇親会を行います。対面は池袋で実施予定です。オンラインは世話人主催のものは予定しておりません。また、フォーラムのみ、懇親会のみの参加でも構いません。
問い合わせ先	:	スポーツ社会学会世話人グループ sportsociology.sewanin@gmail.com

当日タイムライン

研究経過報告	
14:00-14:10	開会・自己紹介
14:10-14:50	塩崎世佳氏(北海道大学大学院) 「武道における「型」の習得と障害のある実践者の身体—研究枠組みの検討—」
14:50-15:20	堀 聰音氏(名古屋大学大学院 教育発達科学研究科 教育科学専攻) 「部活動の地域展開における地域側の担い手論理の構築—「地域の実情に合わせた」移行とは何かに着目して—」
15:20-15:30	休憩
15:30-16:10	村下慣一氏(立命館大学大学院) 「ノルベルト・エリアスにおける「文明化」概念の再考—進化論批判をめぐる学術的評価の妥当性(6)—」
16:10-16:50	八木 まりな氏(国際基督教大学) 「羽生結弦ファンダムにみる現代スポーツファンダムの形成と実践」
16:50-17:00	第35回学生シンポジウムの企画説明 「スポーツ社会学者は何をしてきたのか—「あなた」の語りから—」

(報告要旨)

① 塩崎世佳氏(北海道大学大学院)

「武道における「型」の習得と障害のある実践者の身体—研究枠組みの検討—」

武道には「型」を中心とした稽古体型が存在する。「型」は自由な動きを制約する鎌型として機能する一方、それがあるからこそ自在な動きが可能となる「創造性の土台」としての意味も持つ。こうした両義性に対して、障害のある武道実践者にとって「型」を習得することはいかなる経験であるのか。彼ら自身の「身体」と既存の「型」との関係性に注目して、この問い合わせを考察することを目指し、本発表ではそのための研究枠組みを検討する。

② 堀 聰音氏(名古屋大学大学院 教育発達科学研究科 教育科学専攻)

「部活動の地域展開における地域側の担い手論理の構築—「地域の実情に合わせた」移行とは何かに着目して—」

本研究は、岐阜県の地域展開事例を調査対象に、部活動地域移行の受け皿となる地域側の論理と実践を明らかにするものである。少子化による部活動維持の困難や教員の長時間勤務を背景に改革が進む中、政策では学校部活動の地域への移行による持続可能性を期待している。しかし先行研究は学校中心の視点が主流で、地域の担い手の実態は十分に検討されていない。本研究は政策的実現と現場のギャップに着目し、地域側がいかなる論理で部活動を受容・実践し、その性質がいかに変容するかを描き出すことを目的とする。

③ 村下慣一氏(立命館大学大学院)

「ノルベルト・エリアスにおける「文明化」概念の再考—進化論批判をめぐる学術的評価の妥当性(6)—」

本報告では、来るるスポーツ社会学会に向けた予行として、ノルベルト・エリアス「文明化の過程」論に関する批判的再構成に向けた整理を報告する。これまで報告者が展開してきたダニング、菊幸一、マグワイア批判を踏まえながら、それらの解釈群を超克する解釈上の契機を析出する点に新規性がある。

なお本報告の内容は、唯物論研究協会第48回総会・研究大会における報告内容(「文明化」概念とその課題:ノルベルト・エリアスとマックス・ヴェーバーとの対話)をモディファイしたものである。

④八木 まりな氏(国際基督教大学)

「羽生結弦ファンダムにみる現代スポーツファンダムの形成と実践」

本報告は、フィギュアスケーター羽生結弦のファンダムを事例に、SNS時代におけるスポーツファンダムの形成と実践を検討する。インタビュー調査およびSNS上のファン活動の分析を通じて、ファンが競技成績や国籍だけでなく、中性的でしなやかな男性性を含む演技表現や選手の人柄、語られる物語に価値を見出し、日常生活やオンライン空間で主体的かつ継続的な実践を行っていることを示す。フィギュアスケートにおけるファンダムのあり方から、地域・ナショナリズムに依拠しない新たなスポーツファンの結びつきとコミュニティについて考察する。

⑤第35回学生企画シンポジウムに関する意見交換会
「スポーツ社会学者は何をしてきたのか—「あなた」の語りから—」